



縁ジョイ!

38 エンジョイ
2022 7月号
JULY
<https://www.affetto.co.jp/>



今回のお題は：「好きな寿司ネタ」は何ですか？



友くん 様 東京で学生時代過ごしていたアパート近くでよく通っていた寿司屋でいつも定食を食べていました。アルバイトの給料が入ったときは「こはだ」を握ってもらいました。仲良しになった板さんは大将が不在の時にこっそりと「いか」「えび」も握ってだしてくれました。結局ネタは何でも好きなんです！

あくう 様 普段は回転寿司店に行っていますが、なぜか私の好物の寿司が回って来ません。「きゅうり巻き」です。一番好きですが「かつば巻き」とは呼びません。「あがり」「おあいそ」みたいな符牒のように、あくまで「きゅうり巻き!」と語っています。

名古屋の M 様
やはりトロが好きです。美味しいお寿司を食べに行けるよう頑張ってます。

ほぼか二 様
嫁さん：蒸し穴子・桜鯛
私：タマゴにカッパ巻き
家庭内勢力図と一緒にー!

タルタル部員 様 迷いまくっております(笑) ウニ、マグロ、中トロ、貝類アレコレ... とにかく、イクラ以外は全部好き。大阪にある、あるお店のお寿司コースの最後に出てくる干瓢巻き。それまで知っていた干瓢巻きとは別物でとても感激しました。

ひかり 様 1.タマゴ 2.キュウリ巻 3.シンコー巻 4.巻寿司 4種類です。注意：さかなは一切食べません



代表取締役 **濃明 宏**

明石生まれなので、鯛が好きですが、子供の頃から一番好きだったのは、イクラです。



営業部長 **津田 弘一**

中トロとうなぎが好きで、いつも注文しています。



事務 **辰己 貴子**

私も中トロとうなぎ、タイやヒラメも。タコ、むしあなご。玉子焼。何でも好きです。



営業 **米花 章弘**

鯛や鰯、イカなど赤身魚より白身魚や光り物が好きです。



営業&事務 **木崎 智子**

うに、いくら、サーモン。味のあふものが好きです。



事務 **濃明 恵利子**

鰯寿司大好き!!
ハツテラジャコ、鰯がふ厚いやつです。
握りほろ、中トロ、蒸し穴子、炙りトロサーモン。

◎次回のお題は…「長年続けていること」は何ですか？
FAX、メールでお寄せ下さい。お礼として、図書カードを進呈いたします。

メール: e-koaki@affetto.co.jp
ファクス: 0798-43-0081

皆様にご好評いただいております「縁ジョイ!」なんと今回で創刊10周年を迎えることができました! これも、皆さまからの沢山の温かいお言葉や励ましのおかげです。本当に励みになるのです。そしてこの場をお借りして、毎回頑張って作っている弊社スタッフも、心から褒めてあげたいと思います。内容の吟味、取材、執筆、校正、発送とかなりの業務量です。物珍しさで数回発行するのは簡単かも知れませんが、長く続けることは本当に大変だと思います。毎回楽しみながら作ってくれている女性スタッフ3人に、心から感謝します。10周年を迎えるにあたり、その持続力はいったい何だろうと、改めて考えてみました。それはやはり、保険を通じて知り合ったお客様お一人お一人と、少しでも深く・長く・親しくお付き合いしたい! そんな願いが彼女たちを突き動かしてくれているのだと思います。お客様とも、お取引先様とも、社内でも、幸せのご縁が広がりますように。そのご縁で、楽しい日々を送れますように。そんなことを祈りながら、作り続けて参りたいと思いますので、今後ご愛読の程よろしくお願ひ申し上げます。



濃明 宏



上高地 photo by こあき

お知らせ 2022年10月に火災保険の改定があります。別紙チラシを御覧ください。

三井住友海上火災保険 三井住友海上あいおい生命保険
株式会社 アフェット
〒663-8184 西宮市鳴尾町1丁目14-2
TEL: 0798-43-0041 FAX: 0798-43-0081
Email: e-koaki@affetto.co.jp

終戦を知らず（信じず）、30年間フィリピン・ルバング島に潜んで任務を遂行し続け、昭和49年帰国した小野田寛郎さんのことは、記憶にある方も多いでしょう。小野田寛郎さんと、陸軍中野学校二俣分校で同期だった井登慧さん（明石市在住・99歳）にお話を伺いました。

ご自身の体験、中野学校の教え、同期生だからこそ知る小野田さんのエピソードを2回に渡って掲載します。



【前編】 入営から中野学校入校まで

20歳の徴兵検査を経て昭和18年1月10日に入営したのは「中部50部隊」、姫路・城北練兵場の騎兵連隊です。ここで3ヶ月間みっちり馬の勉強と乗馬訓練をしました。

毎朝、ラッパの音で起きて点呼が済んだらすぐ馬の手入れです。小さい桶に水を汲み、タワシで足の裏を綺麗に洗ってやります。1月から3月と言えば、広峰(山)おろしの寒風が吹き荒れ、冷たい水に手が凍る。馬が寝糞におしっこをしたところにかじかんだ手を入れて温めました。蹄には乾燥して割れないように油を塗ってやり、脚や背中をわらでマッサージします。短い腸に穀物が詰まらないよう、たっぷり水を飲ませてから餌をやります。そうしてやっと人間が食事です。

馬は活きた兵器「活兵器」だから大事にしろ、馬より先に食事をしてはいけないという教えでした。

「尻ではなく、脚で乗る」と教え込まれた乗馬訓練もそれは厳しいものでした。

3月の終わりに、師団司令部のある満州・チャムスへ行きました。満州のずっと北の方、ソ満国境近くです。氷点下30度の寒さで、馬が走ってハアハア息をすると鼻から氷柱が下がっていました。

訓練が続く中、9月の幹部候補生の試験を受けることになりました。試験判定は3段階、甲種合格なら将校になる道が開ける、乙種なら下士官止まり、不合格なら下士官にもなれません。是が非でも甲種に受からねば面目ないと思い、あの時ほど勉強したことはありません。トイレでも暗記し、一日の演習でぐたぐたに疲れていても、消灯後に受験生のみんなと夜通し電気が点いている将校室で勉強しました。結果、私は連隊でただ一人、甲種に合格しました。甲種幹部候補生になると内地の予備士官学校に入ります。

昭和19年1月10日、満州から内地へ帰り、千葉県習志野にある騎兵学校に入校しました。

騎兵学校は将校の養成学校ですから、それは厳しくビシバシやりました。いつでも命を投げ出せ、命を欲しがるような死生観では将校になれない、という教育でした。

騎兵学校の教育は8ヶ月間、8月15日が卒業式です。その1ヶ月前の7月のある日、会議室に呼ばれました。将校4~5人がいて、いきなり「お前は親兄弟と文通を絶って、一切交際しなくてもいいか」「お前が死んでも遺骨は親元には帰らない。それでもいいか」と問う。仕方がないから「いいです」「もちろん覚悟しています。親も私が軍隊に入った以上は覚悟しているから構いません」と答えました。「よし、後ろを向け」、しばらくして「こっちを向け」というので向き直ったら、さっき何かあったテーブルの上が綺麗に片付いている。「テーブルの上に何があったか言ってみろ」と言うので「たばこ、灰皿、万年筆…」あと3つ4つを答えると「よし、帰れ」。何のために呼ばれたのか全然分かりませんでした。

8月15日の卒業式が終わったら原隊に合流することになっていました。その頃満州の原隊は、戦況が悪くなってきた南方へ向かうべく朝鮮の釜山港で海洋訓練をしていたので、そこへ合流しろ、ということでした。ところが、卒業式の朝になって「東部33部隊に入隊せよ」と言われました。場所は静岡県の中野、「何をするとところですか？」と聞いても「わからん。とにかく行け」卒業式が終わるとすぐに二俣へ行き「東部33部隊」を探すも見当たらない。「二俣幹部教育隊」の札がかかっているところへ行って尋ねると「東部33部隊はここだ。お前たちを1期生として迎えるが、まだ準備中だから一度家に帰って、9月1日に来い」とのこと。思いがけず兵庫県加東市の家に半月ほど帰らせてもらい、9月1日に二俣に戻りました。

「東部33部隊」とは、「陸軍中野学校二俣分校」のことでした。

その頃、私の原隊の連隊長から実家の親に「井登慧の消息を知らせろ」と電報がありました。釜山港にいる原隊に戻ってこないで逃亡でもしたかと思ったようです。中野学校は参謀本部直轄の学校で、連隊にいちいち連絡することなく勝手に取ってしまうのです。親は「東部33部隊入隊の命を受けて行った」と電報を打ち返してくれました。親も連隊も東部33部隊が何なのかはわかっていなかったと思います。

中野学校二俣分校の入校式で見た分校長は長髪。当時は皆丸坊主だったので、長髪の将校なんて、変なところやなあと思いました。「ここでは武力戦ではなく、秘密戦を教える。特に遊撃戦、いわゆるゲリラ戦を教育するところだ。本来なら半年か1年かけてやるところだが、南方から米軍が攻めて来ていて、そんなことでは間に合わん。3か月でやるから覚悟しておけ」と訓示しました。

次に、教官である大尉が「二俣の町の特徴は何か」「この町に何ヶ所の軍隊が収容できるか」「この町全体の宿営の畳の数はどれくらいか」などと問います。わからないことばかりです。

7月に騎兵学校の会議室で受けた面接はこの入学試験だったのです。各予備士官学校で同じような試験を受けて選抜された者たちが集まってきました。その晩、皆で集まって「これはえらいところへ来たぞ」と話し合いました。もう第一線へ行けるはずだったのに、こんな町の特徴やら畳の数やら聞かれてもわかるはずがない。早く第一線に行かせてもらおう、と皆で教官のところへ行って詰め寄りました。その中に私と、あの小野田寛郎くんも一緒にいたわけです。教官は「これが難しいことだと分かるだけでも、お前たちは優秀だ。3ヶ月間みっちりやれば分かるようになるから心配するな」となだめられて引き下がりました。そして3か月間の訓練が始まりました。ここが中野学校だったのです。



中野学校見習い士官



俊号に乗る
満州の騎兵隊にて

話を戻しますが、満州の部隊にいた時、馬に助けられた出来事がありました。一人一頭の馬が割り当てられ、私の馬は「俊号」(しゅんごう)という名前でした。ある日のこと、夜間演習で斥候(せっこう)に行けという命令を受けました。斥候とは、敵の様子を探ってくることで、どれくらいの人数がどの辺りにいるのか、地形はどうか、どこから攻めたらいいか、といったことを偵察するのです。夕方出発し、俊号に乗って一人でどんどん行きました。ところが真っ暗になってきて方角が分からなくなってしまいました。北極星や北斗七星が見えたらだいたいの方角が分かりますが、曇りで星の灯りもない、全くの闇夜です。さあ困った。場所はソ満国境の近く、手綱で馬を操って変な方向へ行かせたらソ連の方へ行ってしまうかもしれない、何としても本隊に帰らなければならない。そこで、もう馬に任せなしゃあないと思い、手綱を緩めました。馬に好きなようにせいというつもりでした。すると馬はととととと、何の目印もない満州の大平原を迷うことなく本隊の方へ向かって帰ってくれたのです。

馬の方位勘は人間よりずっと優れていて、目も人間よりよく見えるらしい。それにしてもこの馬は人間より賢く、この馬に助けられたなあと思い、「俊号」の名をずっと憶えていました。戦争も終わって、昭和34年に生まれた四男の名前を考えた時に、人間より賢かった俊号に満州の大平原で助けられたことを思い、「俊宏」と名付けました。俊宏本人は馬から取った名前なんて嫌だったかもしれませんが、今では誇りに思うと言ってくれています。



四男・俊宏さん
「僕は方向音痴！」笑笑